

ALTの職務準備を支援するシステムデザインの研究

－ALT・JTEが構築するグローバル学習コミュニティ－

学位論文内容の要旨

1. 本研究の目的

本研究は、教育現場におけるALT (assistant language teacher 外国語指導助手)の活用の現状を整理するとともに、重要な課題として浮上している事前研修の在り方について、Web ベースの教育システムモデルを提案し、その有効性を理論・実践の両観点から検証するものである。

2. 本研究の背景

今日、英語の教育現場では質・量ともに現状をはるかに上回るALTの積極的な活用が求められ（文部科学省，2002；2003），ALTの職務準備を中心とする研修の強化が切迫した課題である。ALT募集のグローバル化並びに国内配属の拡大化を前提にするならば，現研修システムでALTの職務準備を強化・支援していくのは困難である。現在の集合対面型研修を補完する手段として考えられるのが非同期型WBTの利用である。本研究の調査から以下の観点を含む職務準備支援システムが望まれる。

- ・日本の教育システム，学校文化，生徒の学力の実態の把握
- ・ALTの役割やチーム・ティーチングの目的についてALT及びJTE両者間での共通認識の形成
- ・ALTに求められている資質の醸成

これらの観点を備えるシステムとして，オンライン・フォーラムを活用した学習コミュニティの構築が有効である。参加者は学習コミュニティ内の相互作用から学び合い（Scardamalia & Bereiter, 1994），教師教育においても教員の信条や教員生活の文脈に触れられるとされている（Ferry, Kiggins, Hoban, & Lockyer, 2000）。したがって，ALT（予定者）とJTEが参画するオンライン・フォーラムを活用した学習コミュニティを構築することで，ALT予定者は日本の英語教員社会の文脈に触れられ，職務に対する意識も高められることになる。

3. オンライン・フォーラムを活用した学習コミュニティの構築

以上の背景から，本研究ではALT予定者，ALT経験者，JTEが参画するオンライン・フォーラムを活用した学習コミュニティを構築することを研究課題とした。設計方針は「真正性」，「内省」，「足場づくり」の視点（三宅，1997）や状況的学習論（Lave & Wenger, 1991），実践・教育複合型協調場（武内・田中・林・池田・溝口，2004）の観点に基づき，次の5点とした。

- (i)ALT予定者の職務準備を支援するJTE・ALT経験者が参画するオンライン上の学習コミュニティである。

- (ii)職業教育（ティーム・ティーチング，日本の教室環境，日本の教育制度等）を中心とする。
- (iii)ALT 予定者自身が先達者（ティーム・ティーチング実践者としての JTE・ALT 経験者の役割導入）から気付き(awareness)や共同理解 (collective comprehension) (Chan, 1996) を得る。
- (iv)ALT 予定者が学習コミュニティから職務に対するレディネスを醸成する段階を評価する。
- (v)貢献度・動機付けを明示化する。（先達者の発言の貢献度を質的・量的に可視化する。）

さらに研究仮説として，以下の 3 点を挙げた。

- (a)ALT 予定者のコミュニティへの帰属度は，職務に関する理解度に比例する。
- (b)ALT 予定者のコミュニティへの帰属度は，JTE・ALT 経験者の貢献度（量的・質的）に比例する。
- (c)議論の内容の深化は，ALT の職務への理解度を高めると同時に，JTE・ALT 経験者の職務への考え方に変化をもたらす。

加えて，オンライン・フォーラム学習コミュニティとして，効果的なシステムデザイン，インターフェースデザインを検証することとした。

4. 本研究の学習コミュニティの検証

検証期間は，オンライン・フォーラム（The Forest Forum）を実装後，運用開始日（2007 年 8 月 3 日）からの 68 日間とした。参加登録者数は ALT（予定者）が 16 名，JTE が 14 名の計 30 名であった。The Forest Forum への総投稿数は 72 件あり，参加登録者数における投稿率は全体で 53.3%を示した。運用後，アンケート調査の結果や議論内容の分析を通して，(1)システムデザイン及びインターフェースデザイン，(2)学習コミュニティの観点に基づいて検証を行った。

(1)システムデザイン及びインターフェースデザインの検証

The Forest Forum におけるシステムデザインは，「参加者全員が議論を交わすことで森を成長させる」という考えに基づいて展開されている。この森の拡張のグラフィック化は，極端に返答数が少ない質問トピックもなく，コミュニティ内の相互作用を促進する働きがあることが観察された。ユーザビリティの観点では，オリエンテーション，ナビゲーション，フィードバック機能をシステム，及び運用の両面で強化することが課題として挙げた。システムデザイン全体としては，議論の概況の視覚化は学習コミュニティ内の相互作用の活性化に役立つものであり，今後ユーザビリティの改善を進めることで，さらなる効果を見込めるであろう。

(2)学習コミュニティとしての効果検証

上記で示した(a)～(c)の仮説 3 点はその妥当性が検証された。学習コミュニティでは参加者間の相互作用が働き，多くの参加者に学び合いをもたらしていることが明らかになった。また，The Forest Forum では，知識の伝達だけではなく，ティーム・ティーチングを実践する上での教員の信条についても語られた。ALT 予定者が ALT に求められる資質を知る上で有効な機能を果たしていると言える。したがって，The Forest Forum は ALT の職務へのレディネスを醸成するシステムとして一定の有効性があると結論付けられる。

5. 今後の課題とまとめ

今後は，システム・運営法の改善を進め，その効果検証を繰り返していくことがオンライン・フォーラム形態のグローバル研修を有意義なものにするために不可欠であると言える。学習コミュニティを成立させる上では，協同過程に参加者全員が知覚できることが欠かせない。議論の概況の視覚化が議論の活性化に与える影響度は，オンライン・フォーラム形態の学習コミュニティの方が対面形態に比べ層大きい。オンライン・フォーラム内では参加者間の非言語シグナルが

少ないからである。本研究のシステムデザインは議論の活性化の機能を果たしていることが観察された。議論を通して ALT の資質が培われるならば、ひいては ALT の活用の改善を促すのに貢献すると考えられる。本研究は、ALT の育成や ALT 活用の改善に寄与し、オンライン・フォーラムを活用したグローバル学習コミュニティのシステムデザインをモデル化したという面において、その意義は極めて高いものである。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 西 堀 ゆ り

副 査 教 授 野 坂 政 司

副 査 准教授 田 邊 鉄

学 位 論 文 題 名

A L T の職務準備を支援するシステムデザインの研究

－ A L T ・ J T E が構築するグローバル学習コミュニティ－

本論文は、ALT (Assistant Language Teacher 外国語指導助手)の活用の現状を分析し、日本の英語教育における重要課題である事前研修の在り方について検討し、その解決策の為のデータ収集とシステム構築の実証研究を行っている。具体的には、Web ベースの教育システムモデルを構築・提案し、その有効性を理論・実践の観点から検証している。久島氏は、ALT のみならず、JTE (日本人英語教師) に対する広範なアンケート調査を行い、同種の調査との比較から、教育現場においてALT に望まれる資質を明らかにした。それを基に、望まれる資質を育む機能に留意した Web ベースの研修システムを構築し、オンライン・フォーラムを活用した学習コミュニティの形成を記録・分析し、その有効性が検証されたとするのが久島氏の本論文における主張である。論文の内容に即して、研究の具体的評価を論述する。

第1に、研究テーマの的確性、即ち、本論文が固有の研究領域を有し、テーマが学術研究として意義を持つかを評価した。本論文の研究背景を扱った章において、英語教育におけるALT 研修研究の位置付けと意義が豊富な資料を基に説明されている。日本の英語教育の変遷、JET プログラムとALT 招致の歴史を詳細に辿り、活用の問題点を的確に把握し、提言している。また、情報技術の変革と教育利用に関して、インタラクションの有効性、オンライン・フォーラム、学習コミュニティの構築について、客観的に先行研究を辿り、WBT の効用と課題を論じ、システム構築及び実証的検証の学術的・教育的意義を明瞭に論述している。本論文の学術的貢献は、今まで検討されてこなかったグローバルなALT 研修が可能である事を示した点、また、学習コミュニティの構築を実験実証的に示した点である。

第2に、研究方法の的確性と研究分野への貢献を評価した。ALT 予定者、ALT 経験者、JTE によるオンライン・フォーラムを活用した学習コミュニティ構築を、「真正性」、「内省」、「足場づくり」の視点、状況的学習論、実践・教育複合型協調場の観点に基づいて行っている。運用後、(1)システム及びインターフェースデザイン、(2)学習コミュニティの観点

に基づいて検証を行っている。(1)では、アクセス数や投稿頻度、ユーザーのタスク（作業）を調査・分析し、ユーザビリティの妥当性を考察している。(2)では、量的・質的研究の両面から検証している。量的研究では、可視化ツールを作成し、議論の活性度・深化度・先達者の貢献度に各々指標を設定し、測定している。アンケート調査では、議論の一定の期間を経て、ALT 予定者に対しては職務理解度を示すキーワード、また、JTE・ALT 経験者に対しては職務への考え方の変容に関する質問を行い、回答を数値化し、記述分析も行っている。最終的に、評価ツールの各指標の評価値及びアンケート調査の項目指標の数値の相関を、スピアマン順位相関係数検定によって分析している。質的研究では返答内容やアンケート結果の記述回答を中心に分析し、量的研究の結果と併せて考察を行なっている。方法の論述は明瞭で、本研究の目的に合致していると判断した。従来の研究では対面型研修を対象としていたが、本研究は情報ネットワークを介する方法の効果分析に明確な指標を設定し、相関関係により学習コミュニティ形成の把握を可能とした。この手法は、高度情報化が起こっている現代の教育・学習の分野において、応用が可能となる画期的な提言となっており、多大な貢献と考えられる。

第3に、結果の解釈に対する妥当性を評価した。システム及びインターフェースデザインの検証では、グローバルデザインの視点から、システムの操作、質問・回答フォーラム形態、また、その拡張のグラフィック化が広く受け入れられた点が明らかになった。学習コミュニティの効果検証では、(a)ALT 予定者のコミュニティへの帰属度は職務に関する理解度に比例する、(b)それは JTE・ALT 経験者の貢献度（量的・質的）に比例する、また、(c)議論の内容の深化は ALT の職務への理解度を高めると同時に JTE・ALT 経験者の職務への考え方に変化をもたらすという仮説3点の妥当性が検証された。ALT の職務へのレディネスを醸成するシステムとして一定の有効性があるとする久島氏の主張を受け入れるのに十分な証拠が提示されたと判断する。

以上により、研究テーマ、研究方法、結果の解釈において博士論文として求められる水準を十分に満たしていると判断する。本論文は、英語教育、ICT 活用教育、学習環境デザインの3分野を横断する複合領域的な研究となっている。現代の高度に情報化しつつある教育環境にあっては、領域横断型の研究は重要ではあるが未だ極めて少なく、本論文は的確な分析と検証によって高い成果を上げていると判断され、英語教育への多大な貢献とみなす。

よって著者は、北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。